教授会を攻撃してくれ」と云いながら、又われわれが申し入れる前に教授会規定の第六条（教授会は公開しない、ただし必要ある場合は教授会の決議により、当該学部所属の専任教員を出席させることができる）があるのだからこれを適用して参加出来る様にしたいと言いながらも、適用しようとしなかったし、過去一貫してどんな重要な時にでも（例えば学費値上げストの時も、又今回の学園闘争の時も）適用したことはないのである。これは恰も前向きに考えている様な言動を発しておきながら所詮、そういう事は行なわないのが教授会なのである。もう一つの実例を挙げたい。一九六九・七に助手連絡会議とA班懇談会（工学部の基本方針を枢財する五〇才以下の専任講師以上の人達、学費値上げスト後発足した）と話し合った時にも出席された多くの先生方がわれわれの三大権利と十三項目の要求を認めているので、教授会規定の第三条（教授会総数の1/3以上の者から付議すべき事項を示して教授会招集の請求があったときは学部長は十日以内にこれを招集しなければならない）を適用して三大権利の問題で教授会開催の要求をしたが（A班メンバーは教授会員の1/3以上居る）これもやらなかった。というよりもやる気がないのである。学部長はよく「高年令層が悪い」ということを口にされるが、老若を問わず大部分が駄目なのである。もし学部長の発言通り、若い教授達が前向きに考えているならば、この六条を一度位適用することがあってもいゝ訳だ。それとは逆にこのA班懇談会が過去何回か会議を重ねて来て何をやったかというと、「何もやってない。ただ教授会の開催数を減らしたのが成果だ」との事である。今迄述べて来た様に教授・教授会の腐敗堕落振りは見事なもので、事務職員にすら「工学部の教授会は他のどの学部よりも悪い、あれは無くすべきだ」とまで言われるのである。

自己否定とは

現在に於いて、全ての思想が現実からの挑戦を受け、試練の上に立たされている。こうした現在の思想の在り方、それを担う人間としての研究者の在り方が問われなければならない。

自分は何の為に生きているのか、そして何の為に生きようとするのか、又、自己が存在する社会とは何か、人間にとってきわめて素朴な自己疑問が大学における日常性が否定された時に我々の前に赤裸々な姿をもって問われて来た。私の問題的関心の中心は、あらためてこれら社会と人間を根源的に考えてみる事にある。

人間がまさに唯一人として特殊を持たない純粋な人間関係に立って社会を創造し、かつその様な状況を志向する事を自他に要求する全共闘運動に対して、観念的あるいは理想論として一笑に付し、良い事ではあるが不可能であるといい、自らを日常性や世間という檻に閉じこめ没主体、無自覚的生存者としてただただ現体制への埋没が諸矛盾を拡大させて来ている。それが体制そのものの維持を計って来た存在である。この様な情況の中で再度、人間にとって社会とは何を意味するのか。社会における自己のかかわりあいの接点は何か。等々自己の主体性の回復という人間解放の要求として捉えなおさなければならないし、まさにこの点において自己変革をぬきに、人々を教育、変革しようとする事は補強に否定しなければならない。しかし、この変革しようとする自己とは何か、良心の声が真に自分の声なのか、実は自分の良心を道具にするという別の声ではないのか、これは良心の枠のなかだけにいては判断できない。ここに個々人の問題から人間関係としての社会における自己の在り方を点検しなければならない状況があるのだ。こうした視点において大学における教員の多くは、自分の教え子から「何を問われている」のか解らないし、「自分は立派にやって来た」と云う事によって免罪符を得ようとしたり、教授会や、組織に責任を転嫁したりして自己を弁解しようとしている。まさにこの様な発想と対応しか出来ない存在自身が問われようとしている中でその無責任性、無自覚性は何に由来すると考えるのか。

又、多くの職員においては、日常における教育・研究に対する自己の職責をただ単なる上意下達の官僚的対応で学生や教員に接し、多くの学生（卒業生も含む）が事務窓口や事務内容の苦情をもらしている。まして、自分の職を置く大学をどの様に考えどの様にしようとしているのか大学構成体の大きな部分を占めながらラインシステムの枠でしか考え、かつ行動しない姿は大きな疑問とならざるを得ない。そしてこの様な大学状況の中で多くの「ネトライキ」学生は安易なパスポート習得を考え、あたかも専門的かつ高等な知的作業が出来ることを錯覚し、自らが置かれている大学状況と、社会情況を認識しえないまゝに体制の大枠の中へ押し出されていく存在として現在的にある事を確認できる。

こうした大学に私（実験助手）も又、存在していた在り方が問われなければならない。私が大学において知的労働にしろ肉体労働にしろ、労働を提供した所に経済的みかえりを得て存在していた。この存在の内実において知的なおなってきた労働とは何か。一方において、教員の末端の一員として学生の前に登場し、ビュロクラートの構成体として大学の社会責務（卒業＝労働力を養成）という汚名をありたがって行なっていた。又一方、研究室において研究者としての存在状況も多くは体制に埋没し、日常的に没主体的存在形として遂行されていた。

この様な状況に真こうから対決をせまって来た学生による「大学闘争の運動」の中から、我々の目の前に在る、「教員」、「職員」、「学生」という立場や「大学」、「教育・研究」、等々に対する根底的な認識をつきつける情況が提起されて来た。それは自己をも対象化し、自分にとって何を答えればよいか、又、社会（体制）から逆規定されて来ている自己の状況をどの様な視点をもって把握するかにかかわって来た。

そこには自己の存在が何を意味し、何を営為としていたかの内容を語る事なく、現在と過去、現在と未来への価値転換を設定する事は出来ないであろう。それは簡潔に述べるならば我々が日常性という状況において意識するしないにかかわらず大学の内に存在する矛盾や不正がまさに自分自身が行なって来た、研究や教育そのものであり、よりよく行なおうとする事がその矛盾や不正を更に拡大させ、ひいてはその様な大学を維持させる役割を担って来た状態を自分の在り方を確認する中から見極められた。ここにおいて、従来の「自己の存在状況」、「大学」、「教育・研究」、「教員・学生」等々はまさに多くの抑圧された人達の不幸のうえに、ある存在として享受されているという事実を指摘する事によって全て批判されかつ否定される立場であると考える。即ち、「加害者であり」、「まさしく犯罪者」としての一翼である事は認めなければならない。それは漠然とした不満・不安をはっきりとした形で自分で定着させる事により、いまや多くの大学人は大学の教育・研究に対する良識の限界を知り、大学が自分自身の欲するものを与えてくれない現実を悟った時、大学の存在はありえないし自己そのものの存在もありえないと考える。

この様な現在の大学状況についての根本的な無知えの自覚から出発して来た自己否定の立場にいたずらに埋没していって良いのか。否定思想そのものをやせがまん的に固執したり、安易に従来の在り方を放棄したり、安答えで救われる問題ではない。大学に内在している、日常性の不合理性や矛盾を論ずる立場は、単なる経済的、制度的関係において考えたとしても捉えきれるものではなく、自分の内部だけでは処理出来ない様な矛盾を生み出して来ていることを教えてくれている。更に、一切の人間的疎隔が内包されている現体制において各人が自分をどう考えているかはむしろ第一義的な問題ではなく、自分がどの様な矛盾の中におかれ、その矛盾をどの様に意識しているかが重要となる。だとするならば「溺れる者は藁をもつかむ」という諺がある通り、自分の心の支えがすっかりなくなり、精神的パニック状態に陥った過程で私自身が自立的であろうとするとき個人にとって唯一の現実である現在の真の意味を失わせる存在を否定する必然性がある。このことが自己否定思想が創造的個人にとって自己疎生の最も基本的な出発点である。

ではこの様に必然的に自己の存在を否定しなければならなかった状況の中から私自身が新しい自立した存在であろうとするとき、研究者様式

して科学的認識を不可欠の支柱とするのは、科学の世界では、誤謬の承認を恐れないからであり、又、どんな権威にも誤謬の承認とその修正を要求する事ができるからである。常に世界内存在としての人間認識にとって、誤謬の発生は避ける事の出来ないものであり、誤謬をまさに誤謬として認める事こそ自己を研究主体者として位置づけその苦難な真実への道を「研究」を通して人々の前に明らかにして行く義務を負わなければならない。しかしながら前述した如く大学内の諸矛盾は唯一の客観的現実として我々の前に立ちはだかり自分自身を含む人間解放への存在証明として否定思想の展開がなければならない。再度この時、否定した自己は思想に問う「何をなすべきか」、思想は答える、自己の置かれたさまざまな階層（私の場合大学の助手としての深みの結合（社会）において提れよと、そして「真に価値ある存在とは何か」と自ら進に問えと、この様な問いを持たざるを得ない人間存在に固有な思想としてとらえる事が出来る。そして更に、「将来に亘ってどんな人間と社会に向って歩もうとするのか」と問う。この様に自己否定の思想は自らを壊りまいている現実が生み出す、その矛盾をうち立てられる可能性の全体をあくまで志向するものとして、個別「学問」の知的作業がこれら根底的な問に応ずる反証成論理作業を導く方向に不断に全神化させてゆく事を通じて、初めて、否定思想としてスタート点に立つ事を意味した。

ここにおいて、再度我々が志向している「運動とは何か」、「その運動と自己はどうかかわるのか」、「全共闘運動は在るのか」、「将来どの様な運動を創出しなければならないのか」が問われる思想である。

人間性の回復を運動実体としてかかげ未来を現在的に把握する基軸を、各個人がどの程度まで自分の主体的基軸としてとりこむ事が出来るかはその未来を疎外する現在の構造の中に、理論的にかつ実践的にどの程度まで各個人が入りこんで徹底した自己否定を展開しうるかによってきまる。

この様に否定思想そのものが持つ背水の陣立ては全共闘運動の質的状況から体制に対決を迫まるものとして自己を表現する行動と言語の意味するものの断絶を保証し、かつ自己の存在基盤をかけての運動への加担を遂行させた作業仮定としてすぐれて有効であるし、自己否定の思想性による運動主体の物質化は旧来の大学や日常性をあらゆる部分において否定して行く運動を物質的に展開する状況をも保証している。

即ち、価値観の転換としての連続性は不連続を、旧来の論理を否定し、新しい論理に陥さらえ実在する自己をかけて思想の深化をつきつめた所に最終的状況を設定しうる可能性を模索する思想である。しかしながらかならずしも普遍的な論理が歴史において絶対的に保証されてはいない。これら多くの諸矛盾の解決は未来に委託せざるを得ない。未来を規定して行く現在を強く相互関係させ戦いぬく態度をつらぬかなければならない思想として自己否定の思想はそを体系化し、能動的組織論を創出させてゆく必要があるだろう。

占拠の思想

現在、闘争を果敢に行なっている学生、高校生、労働者を愛近喜みに新しい形態の運動を展開している。その顕著な現象は、自分の「持ち分」を単に拒否することだけでなく、また暫時「持ち場」を離れることのみならず、その「持ち場」を自らの手で長期に渡って物理的に囲い、その中に閉じこもるという即ち「占拠」の形をとっていることに見られる。またその「占拠」した空間の中を自主管理し、新しい創造の場としていることも、もう一つの特徴であろう。

以下「占拠」の意味について論述したい。

i. 「占拠」は拒否権の行使である。

およそ人がその存在の正当性を侵され、認じられなくなった時、異議申し立ては最低自ら保障して行かねばならない。その方法は、初歩的には言論・文書等の抗議活動であるだろう。次には、非協力、不服従であるだろう。そして最終的には自分の実力でもって、自分に存在の有効性をとりもどす行動であるだろう。この「占拠」はこの第三の意味に加えて、それは資本主義的所有形態の否定をも孕むであろう。

資本主義的管理社会において、強者と弱者との階級分裂は必然である。強者は財力・人力・政治力等の全ゆる力をもって弱者に対して立ちはだからない限り、資本間の競合に勝ち抜いて行けないし、そのために彼らの内部なる弱者に犠牲を強いたければ彼ら自身の存在をも強制たるものとなし得ないことは事実であろう。弱者はこれに対し適格な歯止めを、有効なる反撃手段を持ち得ない。持つことの余裕さえも喪失上ない。何故なら彼ら独自の力を持てないことは彼ら自身の存在と既に交換されているからである。身も心も売っていないはずだがその様な関係が諸例の全てである。かくして弱者が好むと好まざるとに拘らず、自らの存在（生活維持）を得るためには強者から逆規定されてしまう。にも拘らず、弱者はより人間的に生きなければならない。全ゆる抑圧の下に置かれているが故に。その抑圧をはね返す以外に人間回復の方法はない。そのために歴史的には抵抗権・拒否権が発動行使されて来た。しかし、それらは所詮、強者、弱者の関係を少なくとも逆転するものではなかった。そして管理社会の上述の矛盾を根底的に精出し、内迫し解消させるものではなかった。また、他の弱者に対の長期的連帯を求め、呼び起こす契機にもならなかった。それは来の間の水に浮かぶ泡沫でしかあり得なかった。要するにそれは原像面を欠落した単なる対策でしかなかったという様括から、従来の抵抗権、拒否権行使と質の違った方法なり、手段が案出された。即ち「占拠」である。

「占拠」は従ってそうした意味での、己れの実力をもってなす拒否・抵抗権の最高形態であり、資本主義の最大矛盾の私的所有財産の否定であるが故に自己の生命を賭しての手段とならざるを得ない。一寸法師が赤鬼の腹の中へ入って活躍するのと似て、それは強者の心臓部へのより強固なアプローチであり、かかる目的遂行的ベースキャンプである。規制の許容範囲を突破して行くが故に従来からの一般的に語られて来た拒否権そのものと、それに安易に寄りかかって来た弱者の姿勢そのものにも「ノン」を行動的思想的に提出するものとなる。であるが故に「占拠」は強者のみならず弱者の両者をもって震撼させるものとなったのである。具体的には大学・高校その他において見られるように「占拠」は実行力としては先進的部分に担わされて来たが、心情的には多くの共鳴を得ているのである。

ii. 「占拠」は自己確認のメディアである。

資本主義的管理社会においては、被管理者（弱者）の財産は何もない と言ってよい。自分の肉体でさえ、心や歴史性さえ他者（管理者＝強者 "体制"）保有の産物でしかない。極言すれば弱者は強者から与えられた持場みでしか、客観的には他律性と人自己Vの持ち場を保障されていない。にも拘らず、小市民的な生活を強いられている多数の大衆はその本来的な、多くの矛盾を自覚し得ず、日常を営為して来た。そしてその日常性さえも、あたかも自分の努力のみで獲得しているかの如く錯覚に陥ち入っているのが現状である。「張も角、オレは真面目にやって来た」という言動はそれを如実に物語ろう。そこにはもはや、現状を疑って見、過去と将来の接点としての自分の位置づけと将来に対する積極的な志向を失っている。これが特に「理性の習」といわれる人大学・教育機関V に籍を置く、教職員・学生の大半であった。だが一度、学生によって一見の平穏さを根底から問い直された時、対応の仕方において、物の見事に、如何にその平穏さが自らの投企によってなされていなかったかを露呈せざるを得なかった。

学生が学ぶ者としての人歴定権利Vを放棄し「学問・大学・社会」等を根底的に追求する手段として、全力投球的に自らを極限状況に追い挙げざるを得なかった。それしか疑制さの振幅に対決し、少くとも自他を覚醒させる方法はもはやない。だがそうすることによってのみ、真と偽、善と悪、事実と慣例、個人と組織、エスタブリッシュメントと主体、等